

# BUDŌ NEWS

## 今月のニュース

### 第72回天皇杯全日本相撲選手権大会



優勝=池田俊（中央）、2位=トワードルジ・ブフチョローン（左）、3位=石崎涼馬（中央奥）、草野直哉（右）



開会式に参加した選手たち



会場の国技館には多くの人が詰め掛けた

# 第72回天皇杯全日本相撲選手権大会 池田俊（金沢学院大）が初優勝

アマチュア横綱の称号をかけた第72回天皇杯全日本相撲選手権大会が昨年12月3日、東京・両国の国技館で全国から68名が参加して開催された。  
決勝は、池田俊（金沢学院大4年）がトワードルジ・ブフチヨローン（日体大3年）を掬い投げで下し、初の栄冠に輝いた。また、池田の優勝は金沢学院大としても初めての優勝であり、その歴史に名前を刻んだ。



天皇杯を手にする池田





準々決勝②=石崎（手前）が川上を寄り倒し



準々決勝①=池田（右）が薄を押し出して勝利



準々決勝④=ブフチョローン（奥）が五島に勝利



準々決勝③=草野（奥）が竹内を寄り切りで下す

■準々決勝

▽池田 俊 ○押し出し 薄 勇樹

金沢学院大学としても初のベスト

8進出を決めた池田と薄の一番は、立ち合いから池田が力強さを見せ、土俵際まで押し込む。得意の左四つは入らなかつたものの、押し相撲で薄を圧倒し、池田が薄を押し出して勝利。順調に準決勝進出を決めた。

▽石崎涼馬 ○寄り倒し 川上竜昌

昨年ベスト8の石崎と川上の一番は、石崎が外掛けから川上の体勢を崩して寄り倒して勝利。

▽草野直哉 ○寄り切り 竹内宏晟

学生横綱の草野と竹内の一番は、竹内が押し出して勝利となるが、審判団による異議申し立てが入り、協議の結果取り直しとなる。取り直しの一番は、草野が立ち合いで竹内をから上げ、そのまま寄り切りで勝利。辛くも準決勝進出を果たす。

▽ブフチョローン ○上手投げ 五島雅治

全国学生個人体重別選手権大会の無差別級で優勝したブフチョローンと、世界選手権で団体戦の大将を務めた五島の同学年対決。試合は、ブフチョローンが得意の左四つから右の上手投げで五島に勝利。



池田（奥）が前に出た石崎を叩き込んで勝利

■準決勝①  
 ▽池田俊 ○叩き込み 石崎涼馬  
 ここまで危なげない相撲で勝ち上がった池田と石崎の一番は、池田が土俵際で突きを連続で繰り出し土俵際まで追い込むと、石崎が前に出たところを叩き込みでいなして勝利。池田が決勝進出。



ブフチョローン（奥）が掬い投いで勝利

■準決勝②  
 ▽ブフチョローン ○掬い投げ 草野直哉  
 全国学生個人体重別選手権大会の無差別級決勝と同じ顔合わせとなった。試合はブフチョローンが、立ち合いから草野の廻しを掴んで下に入り込み、身体に頭をつけて得意の形にすると、掬い投いで草野を下し、ブフチョローンの勝利。決勝に初めて駒を進めた。





池田（奥）が掬い投げでブフチョローンに勝利。初優勝を果たした。



68名の選手によって激闘が繰り上げられた

■決勝

▽池田 俊 ○掬い投げ ブフチョローン  
 決勝は池田とブフチョローンの初優勝を懸けた対戦。立ち合いから左四つで池田の得意の形となる。ブフチョローンが右からおつつけて押し込むも土俵際で池田が先に投げを打ち掬い投げで勝利。池田は自身、そして金沢学院大学としても初の栄冠に輝いた。

# 日々の積み重ねで優勝

◎優勝 池田俊参段（金沢学院大学）



— 今の気持ちを聞かせてください。

「今まで日本一というのは一度もなかったのですが、大学生活の最後の試合で日本一を取れて嬉しく思います」

— 決勝を振り返って。

「ブフチョローン選手には、インカレ（全国学生相撲選手権）の準決勝で勝っていたので、良いイメージのまま思い切って試合に臨めました。立ち合いの狙いは左をしつかり差すことと、ブフチョローン選手は頭をつけられると強いので、体を起こすことを意識しました」

— 金沢学院大学としても初優勝です。

「やってやったなど。自分が優勝して、次は後輩たちが学生横綱、アマチュア横綱のタイトルを他の強豪校のように取って、続けてくれればなと思っています」

— 選手権に向けて稽古で意識していたことはありますか。

「選手権に向けて特に意識するとかはなかったです。日々の積み重ねだと思っているので、しつかり4年間積み重ねたものを出すだけだと思っています。大事なタイトルだとは思っていますが、毎日コツコツやるだけだと思っています」

— 大会を通しての感想は。

「身体がよく動いていたと思えます。先を見ずに、一番一番やれたところがいい結果に繋がったと思います」

— 今後の進路は。

「実業団で相撲を取っていこうと思っています」

## 第72回全日本相撲選手権大会（決勝トーナメント）





# ちびっ子力士が会場を沸かす

## 第36回全日本小学生相撲優勝大会



5年生の部優勝＝梅松琉牙君（右）



4年生以下の部優勝＝若上昆優雅君（左）



6年生の部優勝＝岡山裕弥君（奥）

全日本相撲選手権大会に先立ち、全国から集まった小学生男子による第36回全日本小学生相撲優勝大会が国技館で行われた。大会は4年生以下の部、5年生の部、6年生の部に各33名、計99名の選手が出場し、選手権に負けない熱い戦いが繰り広げられた。

## 日本武道館の単行本



**剣道の文化誌** 明治大学教授 長尾 進 著  
四六判・上製・480頁・定価2,640円

本書では剣道の持つ文化としての多様な面を、時代を追いつつながら、わかりやすく紹介する。剣道を愛好する方には剣道を改めて見直すきっかけとして、剣道をあまりご存知ない方には剣道という日本文化の成り立ちを知るガイドとして、ぜひ一読を。



**剣道 その歴史と技法** 埼玉大学名誉教授 大保本輝雄 著  
四六判・上製・516頁・定価2,640円

本書は戦国末期から江戸時代初期を起点に、今日に至るまでの剣道の歴史的発展の経緯を示した。戦国期以前の剣術の有り様を認識した上で改めて各時代の流れに沿った剣道史を考えてみたいという筆者の思いを実現すべく、連載終了後5年のときを経てついに単行本化。



**合気道 その歴史と技法** 合気道道主 植芝守央 著  
四六判・上製・362頁・定価2,640円

世界140の国と地域、国内2400の道場・団体で愛好される合気道。開祖・植芝盛平翁の生涯、植芝吉祥丸、二代道主による普及・振興、さらなる発展に繋げた現道主による取り組み。その歴史の中で培われ伝え続けてこられた合気道の理念、それを体現する稽古法、基本的な技法の解説……合気道の全てを網羅した決定版。



**空手道 その歴史と技法** 小山正辰・和田光二・嘉手苺徹 著  
四六判・上製・548頁・定価2,640円

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正辰氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苺徹氏の共同執筆で重層的に紐解く。嘉手苺氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一冊。



**マンガ・日本武道風土記** 漫画家・引附大学客員教授 田代しんたろう 著  
B5判・248頁・定価1,100円

全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐってみたい。



**死ぬまで弓道** 弓道教士七段 小牧佳世 著  
四六判・上製・342頁・定価2,640円

競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その8カ月後に弓道を再開し、わずか2年後に皇后盃で10射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自伝を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを検索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ



**学校武道の歴史を辿る** 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著  
四六判・上製・354頁・定価2,640円

明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を探る。

### ご注文・お問い合わせ

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部  
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3  
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158  
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



# 林田智笑(大阪)が6連覇を達成

## 皇后盃 第68回全日本なぎなた選手権大会



皇后盃を手に笑顔を見せる林田選手

なぎなたの日本一を決める皇后盃第68回全日本なぎなた選手権大会が昨年12月3日、開館20年をむかえた愛媛県武道館（愛媛県松山市）で全国から52名の選手が集結し開催された。

決勝は、前回大会と同様の林田智笑（大阪）と安喰愛（島根）が対戦し、延長の末、判定によって林田が6連覇を達成した。

試合は、全日本なぎなた連盟の競技規定ならびに審判規定に基づいて行われた。時間は5分、勝敗が決しないときは判定とし（決勝のみ3分間の延長あり）、トーナメント形式で行われた。



第1試合場では、6連覇がかかる林田が準々決勝で前回大会3位の佐藤あき子（熊本）と対戦。林田はスネを決めて勝利を収めた。準決勝で林田は姉の林田葉純（大阪）と対戦。判定の末、林田（智）が勝利した。

第2試合場では、前回準優勝の安喰が順調に勝ち上がる。準々決勝で金岡智子（大阪）にツキを決めて一本勝。準決勝では、2015・16年優勝の山本千代（和歌山）に旗判定で競り勝ち、決勝に進んだ。







決勝＝林田（左）がメンに飛ぶ

■決勝

林田智笑 判——安喰愛

決勝の対戦は、前回と同様の林田対安喰。今回は林田が旗判定（2—1）で勝利している。

試合は、静寂のなか開始された。互いに遠間から機を窺う。林田は堰を切ったかのように大きな気合とともにメン、スネと攻撃にでる。安喰は絶妙な間合いでなぎなたを用いてそれを防ぐ。両者は有効打突を決められずに何度も接近戦となり、審判の「わかれ」の合図で仕切り直しが続く。そのまま所定の5分が経過し、延長戦へと入った。

互いに間合いを計りながらスネ、メン、ツキと仕掛けるが相手に見切られ1本は決められない。延長3分が終了し、林田に旗2本が上がって勝利。林田は接戦をものにして大会6連覇を達成した。



■ 3位決定戦

山本千代 判—— 林田葉純

試合開始から30秒が経過し、林田が勢いよくメンに飛んだ。続けて林田がスネを狙うが山本はなんなく防ぐ。再三にわたって林田はスネを狙うが、山本はこれを見切って有効打突とはならない。今度は林田がメンに飛んだところを山本がスネに突く。その後も山本は林田の隙を突こうと攻撃を仕掛けるものの試合は終了。旗判定（3―0）によって山本が3位に入賞した。



3位決定戦＝林田（右）のスネを狙う山本

■ 準決勝①

林田智笑 判—— 林田葉純

姉妹による対戦。両者は前々回大会の準決勝で対決しており、林田（智）がメンで一本勝を収めている。2年ぶりの姉妹対決に大きな注目が集まった。開始とともに林田（葉）がメン、林田（智）がスネを突く。その後も互いに仕掛けるものの、両者1本を奪えずに試合は終了。林田（智）に旗3本が上がって試合は決した。



準決勝①＝林田（葉・左）と林田（智）の姉妹対決

準決勝② 安喰（左）がメンを仕掛ける

■ 準決勝②

安喰愛 判—— 山本千代

優勝経験者による対戦となった準決勝第2試合。安喰は2011～13年に3連覇をしている。安喰は素早くツキ、コテを繰り出す。山本もそれに対応し、すぐさま、上下に仕掛ける。選手権者同士によるハイレベルな攻防が続くも、5分が経過。旗判定（3―0）で安喰が勝利した。





## ■公開演武と異種試合

大会では、公開演武となぎなた対剣道の異種試合も行われ、好評を博した。



公開演武＝直心影流薙刀術  
打太刀・野崎房江（右）／仕太刀・阿部妙子



公開演武＝全日本なぎなたの形  
打・廣瀬幸子（左）／仕・我山千枝子

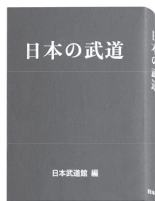


異種試合＝なぎなた対剣道（5人制）  
先鋒戦でスネを決める八木夢依選手（右）



公開演武＝天道流薙刀術  
受太刀・木村恭子（左）／仕太刀・小野由紀子

## ◎日本武道館の単行本



### 日本の武道

日本武道館 編  
（B5判・上製・箱入・526頁）

日本の武道の全てを網羅した、武道関係者必携の書。武道小百科事典としても役立つ充実した資料編を巻末に収録。



### 高め合う剣道

筑波大学名誉教授 佐藤成明 著  
（四六判・上製・564頁）

教育剣道の実践者として長年の経験をもつ筆者が、古今の文献を手掛かりに日々の修練で大事な事柄を綴る。



### 禅の思想と剣術

北海道大学大学院教授 佐藤謙太郎 著  
（四六判・上製・386頁）

禅の思想と剣術がどう関わってきたか、武道伝書を基に検証し、剣術が剣道へと発展昇華していく過程をわかりやすく解説。



### 刀剣の歴史と思想

筑波大学大学院准教授 酒井利信 著  
（四六判・上製・346頁）

日本人が、刀剣を単なる武器としてではなく、神聖なものとして捉える思想とは何か。日本刀剣思想の独自性を確かな史料を基に考察する。



### 人を育てる剣道

剣道範士八段 角 正武 著  
（四六判・上製・268頁）

剣道の真価は、気力を練り上げ、肚をつくる修行にある。人間の土台をつくる剣道を目指す著者渾身の剣道指導論。

## ◎ご注文・お問い合わせ

〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2番3号

日本武道館 教育文化部出版広報課

TEL(03)3216-5147／FAX(03)3216-5158

<http://www.nipponbudokan.or.jp/>

# 試合に集中し、全力で拵んだ栄光

## ●優勝Ⅱ林田智笑選手・五段（大阪府）

「優勝した感想を聞かせてください。今の自分には身の丈に合わない賞です。そのギャップを今後は埋めていかなくてもと思います」

「決勝は去年と同じ安喰選手との対戦でした。」

「前回大会も判定で勝負を決したので、今回は『一本を決めるぞ!』と決勝に臨みましたが、判定になってしまいました。きつちりと一本を取るのが次の課題ですね」

「準々決勝で佐藤あき子選手、準決勝でお姉さんの林田葉純選手と強豪との連戦となりました。」

「とにかく自分の全力を一試合、一試合出し切ることを心がけました。」



久保素子会長から皇后盃を受け取る林田選手

### 林田智笑

(はやしだ・ちえみ)

1995年生まれ、大阪府出身。3歳から藤井寺市剣道雑刀協会でなぎなたを始める。大阪市立汎愛高校、関西大学を経て、2017年から関西福祉科学大学高校の保健体育科教員。

12年、高校総体個人・団体優勝。16年、全日本大学選手権大会個人優勝。19年、世界大会個人3位。全日本選手権大会6連覇（17～19年、21～23年※20年は大会中止）。

「姉との対戦はこれまで教えきれないほどあります。試合中でもお互いの感情がよくわかるので、本当はめちやくちや嫌なんです（笑）」

「5連覇後、この1年間はどのような稽古をされてきましたか。」

「特別にこれをしたというのはありません。ここところ西日本大会で負けたりして、あまり調子良くありませんでした。チャレンジャーの気持ちでこの大会に臨みました」

「今後の抱負を教えてください。」

「まだ、良しあしの波があるので2024年の世界大会に出られるよう、自分のいい状態をキープしていきたいです」

## ●準優勝Ⅱ安喰愛選手・錬士（鳥根県）



「私は松山大学の出身で、大学の4年間をここ松山で過ごしました。」

「この愛媛県武道館は馴染みの場所だ。思い入れがあります。愛媛に来て成長させてもらいましたので、この地で優勝したかったです。相手の林田選手は素直に強かったです。去年も今年も判定となり、お互いに何か物足りないものがあるのだと思います」

## ●3位Ⅱ山本千代選手・教士（和歌山県）



「今までやってきたなぎなたの稽古の成果が少し形になって出せた。」

「今までの稽古の成果が少し形になって出せたのがすごく嬉しいですね。準決勝の安喰選手との試合では技と心の駆け引きがよくできました。負けてはしまいましたが、一番いい試合ができました。やっと気持ちと一緒に技を繰り出すことが体感できました。今回の大きな成果です」



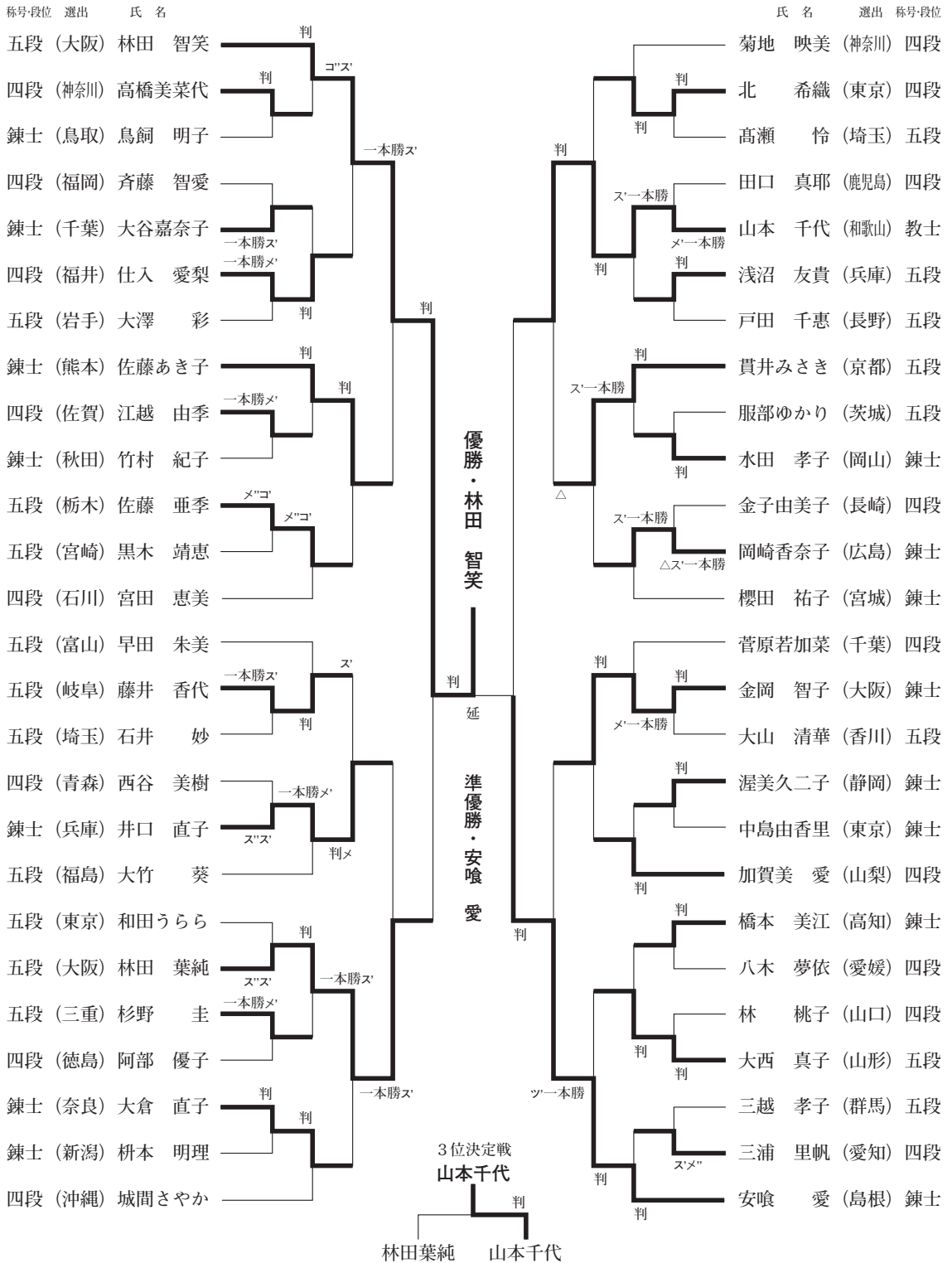
2023年10月で開館20年をむかえた愛媛県武道館



大会は主道場（剣道場が8面設置可能）で行われた



# 皇后盃 第68回全日本なぎなた選手権大会



※表のカタカナ表記は決まり手、その右肩の「」(アポストロフィ)の数は決まり手の順番を表す。

第23回全日本男子なぎなた選手権大会

# 増田道仁<sup>(兵庫)</sup>が父子対決制す

史上初の5連覇・6度目の優勝を飾る



決勝＝増田（道）がメンを仕掛ける

全日本なぎなた選手権前日の12月2日、第23回全日本男子なぎなた選手権大会が愛媛県武道館で60名の選手が出場し、開催された。

決勝は、増田道仁<sup>(兵庫)</sup>と増田良明<sup>(兵庫)</sup>の父子による4年ぶり3度目の対戦となり、判定によって息子の増田（道）が史上初の5連覇・6度目の優勝を果たした。

試合はなぎなた選手権大会と同様の形式で行われた。

第1試合場では増田（道）が準々

決勝で中村優太（神奈川）を、準決勝で南館日奈太（岩手）を一本勝ちで下し、勝ち進んだ。

第2試合場では、増田（良）が準々決勝で松田拓斗（石川）に二本勝ちで、準決勝で山下大輝（奈良）に一本勝ちで勝利して決勝に進出した。

▼決勝

増田道仁 判—— 増田良明

2018・19年以来、4年ぶり3度目の決勝での父子対決となった。両者の大きな気合とともに試合は開始された。増田（道）がスネを狙うも軽やかに増田（良）は躰す。負けじと増田（良）もメンに飛ぶ。両者は激しい攻防を繰り返すものの一本を取れずに延長戦へと移った。増田（良）が素早くメンを仕掛けると増田（道）はそれを防いでスネに転

じるなど、変わらず激戦が続く。延長の3分が経過し、旗判定（3―0）で増田（道）が勝利した。

3度目の父子対決を制して増田道仁が5連覇・6度目の優勝を手中に入れ、試合後に語り合う父と息子の姿が見られた。

▼3位決定戦

南館日奈太 判—— 山下大輝

19才の南館は選手権初出場。準決勝では増田（道）に敗れたものの好試合を見せていた。対して山下は5回目の出場で21・22年と2年連続準優勝を果たしている。選手権の経験値では山下に劣る南館だが、山下に劣らない堂々としたなぎなたを見せる。南館は山下の攻撃を防ぎ、素早くメン、コテ、スネと有効打突を狙いに行く。5分間の試合は終了し、南館に旗3本が上がって、勝利を収めた。





優勝・増田道仁（中央）、準優勝・増田良明（左）、3位・南館日奈太（右）



3位決定戦＝メンを狙う南館（左）



2・3日の大会期間中、来場者にはみかんジュースが振る舞われた。蛇口をひねって新鮮なジュースを注ぐ来場者



公開演技＝選手全員でしかけ・応じが行われた

## ■入賞者インタビュー

### ●優勝Ⅱ増田道仁選手・四段（兵庫）

——5連覇・6度目の優勝となりました。

「ホッとしたという感じですが。決勝は久しぶりの父子での対決となり、嬉しくなり緊張の糸が切れてしまい、試合としてはいけないところもありました。反省しています。5連覇となりましたが、特に意識はしないで大会に臨みました。選手として経歴を重ねるに連れて、誰であろうと『勝つ』ということを意識するようになっていきます」

——今後の目標を教えてください。

「2024年には世界選手権があり、その予選が1月に行われます。父で世界選手権に出場して、なぎなたらしい一本が取れるようにがんばりたいです。前回は父に負けて2位でしたので世界一を目指したいです」

——男子なぎなた界について思うところをお聞かせください。

「今大会で対戦した南館選手もそうですが将来有望な若い選手が増えてきており、嬉しく思います。女子の

なぎなたとは違うパワーやスピードがあります。選手一丸となって男子なぎなた界を盛り上げていきたいです」

### ●準優勝Ⅱ増田良明選手・四段（兵庫）

「なんで2位になったんやろう」という感じです。決勝は父子対決になったので勝ち関係なく、いいなぎなたができるように試合しました。他の人との試合とは違う感覚ですね。最近、僕があまり勝っていないので息子に『お父さん頑張ってるよ』と励まされます（笑）。言われるほどしんどいんですけど、今日は2位になれてよかったです。普段も仕事後に2人で稽古しています」

### ●3位Ⅱ南館日奈太選手・二段（岩手）

「全日本は初めて参加しました。他の大会とは試合の重みが異なり、1試合1試合が決勝戦のような感覚でした。入賞できてよかったです。今年大学に入学して、練習場も岩手から青森に移りました。恵まれた練習環境の中で自分なりのなぎなたを稽古でつくれたのが結果につながったのかなと思います。関係者の方々に感謝しつつ、もっと重い打突ができるよう頑張っていきます」

# 柔道 グランドスラム東京2023

JUDO GRAND SLAM TOKYO 2023

## 日本 男子3階級、女子4階級で金



グランドスラム東京2023 (主催Ⅱ国際柔道連盟、主管Ⅱ全日本柔道連盟) が12月2・3日の2日間、東京・千駄ヶ谷の東京体育館で開催された。大会には世界84カ国・地域から男女合わせて506名の選手が出場。東京2020オリンピックメダリストや世界ランキング上位者が多数出場し、各試合場で激戦が繰り広げられた。

日本人選手では、永山竜樹 (SBC 湘南美容クリニック)、阿部一二三 (パーク24)、村尾三四郎 (ジヤパンエレベーターサービスマーケティング)、角田夏実 (SBC 湘南美容クリニック)、阿部詩 (パーク24)、高市未来 (コマツ)、新井万央 (日本体育大2年) の7名が金メダルを獲得した。

男子90kg級・決勝=村尾(手前)が内股でマイスラーゼを下す

### 男子・90kg級

#### 村尾が初優勝、パリオリンピック金メダルへ確かな一歩

パリオリンピック代表に決定している村尾三四郎と、世界ランク1位のL・マイスラーゼ(ジョージア)が決勝で相見える。ゴールドスコアに突入し、マイスラーゼが大外刈を仕掛けようとするが、技の切れ目に村尾が内股を繰り出し(写真)、一本。優勝を手にし、パリ2024オリンピックのメダル獲得に向けて好調なスタートを切った。

試合時間は男女ともに4分。時間内に勝敗が決しない場合はゴールドスコア(以下、GS)に突入し、ポイント(一本、有効、技あり)を先取した方が勝利となる。

本大会は選手の試合以外に、来場者に向けた多様な柔道の価値を共有するためのイベントも開催された。



## 男子・60kg 級

### 永山、高藤とのライバル対決を制す

決勝は、東京 2020 オリンピック金メダリストの高藤直寿（パーク 24）と永山竜樹の対決。両者は 2019 年大会決勝でも対戦し、その試合は高藤が永山を破りオリンピック出場を決めている。GS で、永山が渾身の一本背負投を放つと（写真）、見事に一本となり勝利。4 年ぶりのリベンジを果たした。



男子 60kg 級・決勝＝永山（手前）の一本背負投が決まる



試合終了後、健闘を讃（たた）えあう両者



男子 66kg 級・決勝＝阿部（上）が引込返で一本をとる

## 男子・66kg 級

### 阿部（一）が2大会ぶりの グランドスラム制覇

東京 2020 オリンピック金メダリストの阿部一二三は、一回戦から決勝まですべて一本勝で勝利する快進撃を見せ、決勝に進出。決勝では世界ランク 2 位の B・ヨンドンベレンレイ（モンゴル）を引込返の一本勝で下し（写真）、圧倒的な力を示して優勝した。

## 女子・48kg 級

### 一瞬の決勝、角田が圧巻の強さで金

角田夏実と、J・フィゲロア（スペイン）が決勝を争う。試合開始早々に角田がフィゲロアの足を払う。体勢を崩したフィゲロアの右腕を角田が素早く捉えると、腕挫十字固に転じる（写真）。フィゲロアがたまたま「参った」し、試合終了。試合時間わずか 25 秒の決着に会場は大きくどよめいた。



女子 48kg 級・決勝＝角田（奥）の腕挫十字固



序盤から積極的に攻める阿部(手前)



女子 52kg 級・決勝＝阿部（左）が小内刈りでネットを下す

## 女子・52kg 級

### 阿部（詩）が女王の座を守り抜く

阿部詩と、A・ネット（フランス）による決勝。阿部が序盤から積極的に攻める。ネットが負けじと応じるも、ディフェンディングチャンピオンの阿部は試合のペースを譲らない。ネットが強引に担ごうとした隙を、阿部が小内刈りで仕留め、見事一本（写真）。阿部が盤石の強さで 2 連覇を達成した。

## 女子・63kg 級

### ベテランの高市が意地の2連覇

前回覇者の高市未来と今年の講道館杯で優勝してる山口葵良梨（国士舘大4年）の決勝。山口が得意技の内股を連続で仕掛け、高市を攻める。高市は必死に耐えるも極端な防御姿勢の反則を一つ付与される。試合はGSへ突入。山口が内股を仕掛けるタイミングを見計らい、高市が上から崩し、縦四方固で抑え込み、一本を奪う（写真）。高市が2連覇を成し遂げた。



女子63kg級・決勝＝高市（上）が縦四方固で一本



女子78kg超級・決勝＝新井（上）が崩上四方固で抑え込む

## 女子・78kg 超級

### 新井が全試合一本勝で優勝

決勝戦は、新井万央とL・フォンテーヌ（フランス）が争った。互いに消極的姿勢の反則が2回ずつ付与され、勝負の行方はGSへ。新井の攻めにフォンテーヌが体制を崩す。新井は好機を逃さず、崩上四方固で抑え込み、一本。新井は初出場ながら、全て一本勝でグランドスラム初制覇を果たした。

## ○その他の試合

### ■男子

#### ●73kg級

2連覇を狙う橋本壮市（パーク24）と、世界ランク1位のH・ヘイダロフ（アゼルバイジャン）が決勝を争う。GS開始直後、ヘイダロフが橋本の右腕を捕らえ、体制が崩れたところをすかさず隅返に転じられ、技あり。橋本は連覇を逃すこととなった。

#### ●81kg級

パリ2024オリンピック代表選手に決定している永瀬貴規（旭化成）が、3回戦で痛恨の敗退。決勝戦は世界ランク2位のL・ジョンファン（韓国）と、M・カス（ベルギー）が争い、ジョンファンが小内巻込で技ありを先取。時間いっぱい守り切り優勝を手にした。

#### ●100kg級

悲願の優勝を狙うウルフ・アロン（パーク24）は、3回戦で前回大会で敗れているG・ピレツリ（イタリア）と対戦。果敢に攻め込むも反

則負けで無念の敗退。決勝に進んだのは、M・カニコフスキー（中立選手）と、準決勝でピレツリを下した新井道大（東海大1年）。上り調子の新井だったが、試合開始から間もなく引込返を決められ、あえなく敗れてしまった。

#### ●100kg超級

齊藤立（国士舘大4年）は、準々決勝でK・ミンジヨウン（韓国）と戦い、払腰からの袈裟固で合わせ技一本を許し、敗退。決勝は、ミンジヨウンとT・バシヤエフ（中立選手）が争い、バシヤエフが浮落で一本勝ちした。



男子73kg級・決勝＝橋本（右）対ヘイダロフ



■女子

●57kg級

前回大会を制した舟久保遥香（三井住友海上）が怪我のため欠場。講道館杯を制した古賀ひより（パーク24）や体重別選手権で初出場初優勝を成し遂げた高野綺海（日本エースサポート）などが健闘するも、3回戦の時点で全員が姿を消した。決勝はC・デグチ（カナダ）とJ・リマ（ブラジル）が対戦し、デグチが大外刈を決め金メダルを手にした。

志歩（JR東日本）と、S・ファン・ダイク（オランダ）が決勝を争った。GSに突入し、田中が内股を攻めたところをファン・ダイクが体を捻らせて裏投に転じ、技あり。田中は銀メダルとなった。

●78kg級

東京2020オリンピック金メダリストの濱田尚里（自衛隊体育学校）、本年度、講道館杯で優勝した杉村美寿希（東海大2年）が3回戦で姿を消し、前回大会覇者の高山莉加（三井住友海上）、今年の全日本女子柔道選手権覇者の梅木真美（ALSOK）がともに準決勝で敗退。決勝は、濱田、高山を破ったI・ラニル（イスラエル）、杉村と梅木を破ったM・アギアル（ブラジル）が争い、アギアルが払巻込で技ありを先取し優勝した。

「決勝の高藤選手は尊敬する先輩であり、ずっと争ってきたライバルでもあります。東京2020オリンピック代表選考の時（グランドスラム大阪・2019年）は、決勝で高藤選手に負けて代表になれなかった

○優勝者インタビュー

●60kg級優勝II永山竜樹選手

（SBC湘南美容クリニック）



「国内で行われる国際大会がこのグランドスラム1回しかないという中で、多くの観客の皆さんの前で、自分の柔道を見せて優勝することができて良かったと思います。（決勝戦について）相手もフイイントや足技が上手く、身体の反応もすごく良かったと思います。ですが、世界を相手にするには、どんな状況にも惑わされず、適応できることが大事になってくると思うので、どんな相手とやってもしっかりと投げられる技を、パリオリンピックに向けてさらに練習していきたいです」

●90kg級優勝II村尾三四郎選手

（ジャパンエレベーターサービスホールディングス）



「怪我からの復帰明けて、まだ痛いところもあるんですが、そういった中でも強敵相手に勝ったというのは、自信になりました。ですが、内容だけ見れば70点くらいですかね。」

●70kg級  
体重別選手権大会で優勝した田中



女子70kg級・決勝＝田中（左）対ファン・ダイク



●66kg級優勝II阿部一二三選手

（パーク24）

「試合終了後」高藤選手に『よく頑張ったな、これからも頑張れよ』と声をかけられた時、胸にくるものがありました」

準決勝の指導をとられた場面や、自分が必要に潰れてしまったところなど新たな課題が見えてきたので、パリオリンピックで優勝するため一工夫つくりアしていきます」

●48kg級優勝 角田夏実選手

(SBC 湘南美容クリニック)



「決勝の相手が前回負けた選手だったので、すごい緊張していたのですが、勝って良かったです。本当はもうちょっといろいろ試したり、パリオリンピックに向けて課題を見つけられるような試合をしようと思っていました。ですが、試合場に立つとどうしても勝ちにこだわってしまい、無意識にいつも通りの試合をしてしまいました。得意技にしている巴投や、関節技、寝技は、パリオリンピックでも他の選手から相当研究されていると思うので、今後も課題を持ちながら今後の世界大会に臨みたいです」

●52kg級優勝 阿部詩選手 (パーク24)



「こんなにたくさんの人に応援される中で試合が久々だったので、とても嬉しかったです。(5月の)世界選手権でも兄妹で優勝し、今年(2023年)は2人とも負けなしで来年のオリンピックに向けて良いスタートを切れたと思っています。周りから見れば圧倒的な試合だったと思われるかもしれませんが、1回戦でなかなか足が動かないことや、投げ急いでしまう部分など、まだまだ課題があると思うので、次試合までに改善していきたいです」

●63kg級優勝 高市未来選手

(コマツ)



「今は優勝できてほっとした気持ちですが、これから待っている厳しい道のりへの覚悟も芽生えています。(今後の進退について) 本当にもうやめようと思いましたが、選手としても体は限界でした。ですが、今こうやって試合が、柔道ができていくことにすごく喜びを感じています。過去2回出場したオリンピックでは自分の中で勝手に魔物をつくって縮こまって挑んでいたのですが、今回はそんなことはせず、シンプルに自分の価値を分かち合うイベントを開催 本大会では、会場に訪れた観客と多様な柔道の価値を共有することを目的としたイベントが行われた。2日には、全日本柔道連盟が策定する「長期育成指針」についてのトークショーが行われ、3日には、パラ柔道と全日本柔道連盟アスリート委員会によるエキシビジョンマッチと、メダリストとキッズ柔道家のエキシビジョンマッチが行われた。キッズ柔道家のエキシビジョンマッチには、東京2020オリンピック金メダリストの大野将平氏(旭化成)、新井千鶴氏(三井住友海上)が対戦相手として登場し、未来のメダリストたちと試合を行った。

分の良さを出していきたいです」



本大会終了後に全日本柔道連盟強化委員会が開かれ、パリ2024オリンピックの代表選手についての審議が行われた。その結果、男子60kg級の永山竜樹選手、女子63kg級の高山莉加選手、女子78kg級の高山莉加選手の3名が代表選手に決定した。残す階級は男子100kg級のみとなり、本年度開催される世界大会の結果を踏まえ審議される。

○柔道の価値を分かち合うイベントを開催



メダリストとキッズ柔道家のエキシビジョンマッチ。大野将平氏に華麗な背負投を決める山田航太郎君(向原柔道クラブ・写真手前)

【大会結果】

◆男子	優勝	2位	3位	その他の日本選手
60 * <sub>6</sub> 級	永山竜樹 (SBC湘南美容クリニック)	高藤直寿 (パーク 24)	中村大樹 (国士館大 3年) A.BLIEV (中立選手)	樋口裕大 (大阪府警) = 1 回戦敗退
66 * <sub>6</sub> 級	阿部一二三 (パーク 24)	B.YOUDONPERENLEI (モンゴル)	D.VIERU (モルドバ) H.AGAMAMMEDOV (トルクメニスタン)	福田大和 (東海大 2年) = 2 回戦敗退
73 * <sub>6</sub> 級	H.HEYDAROV (アゼルバイジャン)	橋本壮市 (パーク 24)	M.LOMBARDO (イタリア) G.TERASHVILI (ジョージア)	竹市裕亮 (国士館大 1年) = 1 回戦敗退
81 * <sub>6</sub> 級	J.LEE (韓国)	M.CASSE (ベルギー)	D.KAPAPETYAN (中立選手) Z.TCKAEV (アゼルバイジャン)	永瀬貴規 (旭化成) = 3 回戦敗退 天野海斗 (東海大 2年) = 2 回戦敗退
90 * <sub>6</sub> 級	村尾四郎 (ジャパニエバーターホールディングス)	L.MAISURADZE (ジョージア)	M.IGOLNIKOV (中立選手) C.PARLATI (イタリア)	川端倅明 (国士館高 3年) = 2 回戦敗退
100 * <sub>6</sub> 級	M.KANIKOVSKIY (中立選手)	新井道大 (東海大 1年)	Z.KOTSOIEV (アゼルバイジャン) M.KORREL (オランダ)	ウルフ・アロン (パーク 24) = 7 位 飯田健太郎 (旭化成) = 2 回戦敗退、植岡虎太郎 (日本製鉄) = 3 回戦敗退
100 * <sub>6</sub> 超級	T.BASHAEV (中立選手)	M.KIM (韓国)	I.TASOEV (中立選手) L.KRPALIK (チェコ)	斉藤 立 (国士館大 4年) = 5 位 藤本偉央 (日本体育大 2年) = 7 位
◆女子	優勝	2位	3位	その他の日本選手
48 * <sub>6</sub> 級	角田夏実 (SBC湘南美容クリニック)	J.FIGUEROA (スペイン)	宮木果乃 (日本大 1年) C.COSTA (ポルトガル)	
52 * <sub>6</sub> 級	阿部 詩 (パーク 24)	A.GNETO (フランス)	G.PROMO (イスラエル) S.LKHAGVASUREN (モンゴル)	神谷 鈴 (龍谷大 3年) = 1 回戦敗退
57 * <sub>6</sub> 級	C.DEGUCHI (カナダ)	J.LIMA (ブラジル)	J.KLIMKAIT (カナダ) C.L.LIEN (チャイニーズタイペイ)	高野峰海 (日本エーススポーツ) = 7 位、玉置桃 (三井住友海上) 本田里実 (敬愛高 2年) = 2 回戦敗退、古賀より (パーク 24) = 1 回戦負け
63 * <sub>6</sub> 級	高市未来 (コマツ)	山口葵良梨 (国士館大 4年)	J.VAN LIESHOUT (オランダ) 高木水月 (明治国際医療大 2年)	堀川 恵 (パーク 24) = 5 位
70 * <sub>6</sub> 級	S.VAN DIJKE (オランダ)	田中志歩 (J R 東日本)	S.MOSCALU (ルーマニア) A.TUNODA ROUSTANT (スペイン)	寺田宇多美 (JR 東日本) = 5 位、西願寺里保 (コマツ) 本田万結 (東海大 1年) = 2 回戦敗退
78 * <sub>6</sub> 級	M.AGUIAR (ブラジル)	I.LANIR (イスラエル)	H.YOON (韓国) 高山莉加 (三井住友海上)	梅木真実 (ALSOK)、村村美寿希 (東海大 2年) = 5 位 濱田尚里 (自衛隊体育学校) = 7 位
78 * <sub>6</sub> 超級	新井万央 (日本体育大 2年)	L.FONTAINE (フランス)	S.PARK (韓国) R.HERSHKO (イスラエル)	児玉ひかる (SBC湘南美容クリニック) = 5 位、瀬川麻優 (ALSOK) = 7 位 高橋瑞晴 (SBC湘南美容クリニック) = 2 回戦敗退

日本武道館の単行本



**剣道の文化誌** 明治大学教授 長尾 進 著  
四六判・上製・480項・定価2,640円

本書では剣道の持つ文化としての多様な面を、時代を追いながら、わかりやすく紹介する。剣道を愛好する方には剣道を改めて見直すきっかけとして、剣道をあまりご存知ない方には剣道という日本文化の成り立ちを知るガイドとして、ぜひ一読を。



**剣道 その歴史と技法** 埼玉大学名誉教授 大保本輝雄 著  
四六判・上製・516項・定価2,640円

本書は戦国末期から江戸時代初期を起点に、今日に至るまでの剣道の歴史的発展の経緯を示した。戦国期以前の剣術の有り様を認識した上で改めて各時代の流れに沿った剣道史を考えてみたいという筆者の思いを実現すべく、連載終了後5年のときを経てついに単行本化。



**合気道 その歴史と技法** 合気道道主 植芝守央 著  
四六判・上製・362項・定価2,640円

世界140の国と地域、国内2,400の道場、団体が愛好される合気道。開祖・植芝盛平翁の生涯、植芝吉祥丸二代道主による普及・振興、さらなる発展に繋げた現道主による取り組み。その歴史の中で培われ伝え続けてこられた合気道の理念、それを体現する稽古法、基本的な技法の解説……合気道の全てを網羅した決定版。



**空手道 その歴史と技法** 小山正長・和田光二・嘉手苺徹 著  
四六判・上製・548項・定価2,640円

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、今や世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、那覇系剛柔流の小山正長氏、首里系松濤館の和田光二氏、沖縄空手研究の第一人者である嘉手苺徹氏の共同執筆で重層的に紐解く。嘉手苺氏が発見した剛柔流の開祖・宮城長順の最新の事実、小山・和田の両世界チャンピオンのエピソードなども満載。空手の真髄に迫る白眉の一作。



**マンガ・日本武道風土記** 漫画家・別府大学名誉教授 田代しんたろう 著  
B5判・248項・定価1,100円

全国の「武道ゆかりの地」を実際に訪ねて、ペンとスケッチブックを片手に徹底取材。地元関係者や施設の学芸員とのやりとり、その土地の成り立ちをわかりやすくマンガで紹介。多数の資料をもとに丹念に描いた当時の風景も魅力の一つ。マンガの世界で日本各地をめぐってみたい。



**死ぬまで弓道** 弓道教士七段 小牧佳世 著  
四六判・上製・342頁・定価2,640円

競技中に急性大動脈解離に倒れた筆者は奇跡的な生還を果たす。その8か月後に弓道を再開し、わずか2年後に皇后盃で十射皆中、優勝を果たした。本書では激動の自伝を記し、弓のあり方や「早気」など弓道家の誰もが陥る課題などを模索する。死の淵を覗き、現在も全身全霊で弓を引き続ける筆者だからこそ記せた弓道伝記かつエッセイ



**学校武道の歴史を辿る** 筑波大学名誉教授 藤堂良明 著  
四六判・上製・354項・定価2,640円

明治維新を迎え、武術は衰退したが、近代化の過程で武道が「人間形成の道」として学校制度の中に組み込まれ、発展した。太平洋戦争後に武道は全面禁止となるが、それを乗り越え、「格技」として復活。平成24年度には「中学校武道必修化」が実現した。学校武道の歴史を丹念に辿り、今後のあり方を探る。

ご注文・お問い合わせ



(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部  
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3  
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158  
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



第67回全日本大学空手道選手権大会

男子団体組手

# 近畿大工学部 悲願の初優勝

(中四国)

大学空手日本一を決める第67回全日本大学空手道選手権大会が昨年11月19日、日本武道館で開催された。男子団体組手では、近畿大工学部(中四国)が、決勝で近畿大(関西)を下し、悲願の初優勝に輝いた。女子団体組手では、京都産業大(関西)が初優勝を果たした。団体形の部は、男女ともに帝京大(関東)が盤石の強さで優勝に輝いた。



男子団体組手・決勝＝近大工学部の中堅・山内（左）が上段突きを決める



男子団体組手 決勝

○近畿大工学部 3-0 近畿大

決勝は前回大会3位の近畿大工学部と、前回大会準優勝の近畿大の同大学対決。先鋒戦は、近大工・豊田陽也と近大・南秀之輔の対戦。試合は豊田が先取するも、南が食らいついていく展開。両者果敢に攻め続け、ポイントを取っては取られの試合を、豊田が4-3の僅差で制して近大工が先に一勝する。続く次鋒戦は、近大工・北代涼馬と近大・中村



近大工の先鋒・豊田（左）が中段突きを決める

虎太郎の対戦。試合開始1分59秒、北代が中段突きで先取。さらに残り時間31秒、北代が中段蹴りで技有りを取るなど、ポイントを重ねていく。なんとか追いつきたい中村は、試合終盤に有効を取るも、ポイント差を埋められず4-1で試合終了。近大工が初優勝に王手をかける。中堅戦は近大工・山内健太郎と近大・赤曾部瑞生の対戦。お互い決め手に欠く中、開始2分に両者同時に中段突きでポイントを取り、1-1となる。その後赤曾部が有効で先取し、さらにポイントを重ねて優位に立つ。しかし、残り時間12秒で、山内が有効を取り、あと1ポイントで逆転の状況まで持ち込むと、試合時間残り3秒、山内が上段突きを決めて逆転に成功し、試合終了。劇的な逆転勝利で近畿大工学部が初優勝に輝いた。

◎優勝Ⅱ近畿大工学部・松元和昭監督

「今回、無敗で優勝できたので最高の結果だと思えます。少数精鋭・文武両道でやってきた成果ができました。力を出し切れたら負けることはないと思っていますので、選手を信じて見守っていました」

女子団体組手 決勝

○京都産業大 2-0 東洋大

決勝は前回・前々回準優勝の京都産業大と初の決勝進出を果たした東洋大の対決。先鋒戦は京産大・向井瑠杏と東洋大・今井えりの対戦。試合は開始早々向井が先取すると、その後突きでポイントを重ね続け、6-0で試合終了。向井が今井を倒し、勝利をもたらした。中堅戦は京産大・小堂利奈と東洋大・石井菜南子の対戦。中盤に小堂が先取。さらに残り27秒で再び小堂が有効を取る。後がない石井はポイント



京産大の先鋒・向井（左）が中段突きを決める

を奪えないまま試合は終了。京産大選手は、決勝で1ポイントも相手に取られることなく、初の栄冠に輝いた。

◎優勝Ⅱ京都産業大・荒賀龍太郎監督  
「前回も前々回も決勝の舞台で負けていたので、今年こそはと思っただけ生たちも日頃の稽古から一生懸命取り組んでいました。その力を発揮できたことが優勝に繋がったと思います。特に先鋒の向井が良い流れを持ってきてくれたので、それが優勝に繋がったと思います。来年連覇を目指して頑張ります」

◀京産大の中堅・小堂（左）の上段突き







男子団体形・決勝＝帝京によるウンスー（分解）の演武



女子団体形・決勝＝帝京によるウンスーの演武



男女ともに形の部で優勝を果たした帝京大学

## 男子団体形 決勝

○帝京 ウンスー

駒澤 ゴジウシホシヨウ

決勝は過去13回の優勝を誇る帝京大と、初優勝を目指す駒澤大の顔合わせ。最初に帝京大が演武を披露。一糸乱れぬ連携と、キレのある動き

で観客を魅了。対する駒澤大は、メリハリのあるゴジウシホシヨウを披露。

結果は帝京大が28・80点で駒澤大（27・70点）に勝利。4連覇14回目の大会優勝となった。

◎優勝Ⅱ帝京大・本幸司監督

「とりあえずホツとしています。力は少し出し切れていなかった印象を受けました。あの3人ならもう少しいい演武ができたと思います。今は3年生3人でやっているの、来年はさらに圧倒的な力で優勝できるように頑張ります」

## 女子団体形 決勝

○帝京 ウンスー

同志社 アンナン

決勝は昨年と同じ顔合わせの帝京大と同志社大の対決。最初に演武を

行ったのは同志社大。分解を演武している際、ほんのわずかに体勢を崩す場面もあったが、最後まで気迫溢れる演武を披露した。

続く帝京大は男子と同じくウンスーを演武。圧巻のスピードとキレで鍛錬の成果を存分に発揮した。

結果は帝京大が28・80点、同志社大が27・70点で、帝京大が13連覇15回目の優勝に輝いた。

◎優勝Ⅱ帝京大・岡本沙織監督

「予選からずっと安定した形が打っていた印象でしたし、しっかり技術を見せられたと思います。来年はさらに成長した姿を見せたいと思います。連覇については特に気にしていません。毎年メンバーも変わりますし、いつも挑戦者として大会に臨んでいます。帝京らしい形を打つことと、チーム力で他に負けない自信があるので、そこに重点を置いて来年も頑張ります」



# 富士の麓から武道精神を世界に発信

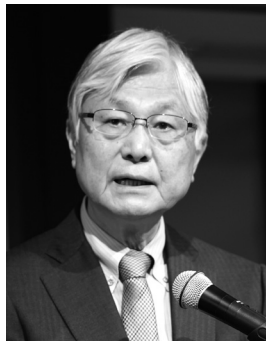
東アジア文化都市 2023 静岡県記念シンポジウム



パネルディスカッションの様子。左からモデレーターの矢野弘典氏、パネリストの笠谷和比古氏、アレキサンダー・ベネット氏、日馬富士公平氏、瀬戸謙介氏、植芝充央氏、井上康生氏



来賓挨拶 (ビデオメッセージ)  
室伏広治スポーツ庁長官



来賓挨拶  
本保芳明初代観光庁長官



来賓挨拶  
高村正彦日本武道館会長



主催者挨拶  
川勝平太静岡県知事

「勇」「誠」「証」「礼」「普」がある。

●講演 「武士道の精神」(概要)

川勝平太静岡県知事の主催者挨拶に続き、高村正彦日本武道館会長、本保芳明初代観光庁長官が来賓挨拶を述べ、室伏広治スポーツ庁長官のビデオメッセージが披露された。

■開会式

高村正彦日本武道館会長が「武士道・武道の精神について大いに語り合い、その模様が世界に発信された。」と述べた。

高村正彦日本武道館会長が「武士道・武道の精神について大いに語り合い、その模様が世界に発信された。」と述べた。

東アジア文化都市2023 静岡県記念シンポジウム(主催)静岡県、後援)スポーツ庁)が11月22日、「文化の首都静岡県から武道を世界に」をテーマに、富士スピードウェイホテル(静岡県小山町)で行われた。シンポジウムは、日本の伝統文化・武道が有するさまざまな効用を国内外に紹介することを目的に、笠谷和比古国際日本文化研究センター名誉教授による講演と、各武道の有識者によるパネルディスカッションの2部構成で実施された。各道を代表するパネリストが人材育成に役立つ武士道・武道の精神について大いに語り合い、その模様が世界に発信された。

特に「普」については、武士道の普遍性を指している。巴御前などの女性武術家に見られるように、武士道は男女の性差を問題としない。そのため、男女関係なく、武士道の精神をもって社会生活を営むことができる。「忠」「義」「勇」「誠」「証」「礼」の徳目に共感した人であれば誰でも武士道の精神を實踐することができる。そういった、武士道の普遍性が江戸時代に一般庶民に受け入れられ、現代まで連続と受け継がれている。



講演する筈谷和比古氏

●パネルディスカッション



モデレーターを務めた  
矢野弘典氏

モデレーターは、柔道五段の経歴を持つ矢野弘典（一社）ふじのくにづくり支援センター理事長・産業雇用安定センター会長が務めた。

各パネリストは、武道で培われる心と体、武道による人材育成、それぞれが長年の武道修業から体得した武道の魅力や価値、武道を学ぶ若年層へのメッセージなどを語り合い、会場に詰めかけた多く来場者は熱心に聞き入っていた。

◇「東アジア文化都市」とは……ヨーロッパの「欧州文化首都」をモデルに、2014年に日本・中国・韓国で開始された事業。各国で都市を選定し、文化事業や国際交流事業を実施して相互理解と連帯感の形成を促進するとともに、東アジアの多様な文化の国際発信力の強化を図ることが目的。節目の10年目となる2023年は、中国・四川省の成都市、同広東省の梅州市、韓国の全州市とともに、日本では静岡県が選定され、年間通じて多彩な文化芸術イベントなどが開催された。

●アレキサンダー・ベネット氏(剣道等)



剣道界には「打って反省、打たれて感謝」と言う言葉があります。打った技、打たれた場所について常に内省し、自己の研鑽に努めることを意味します。そういった武道の稽古を何年も続ける姿勢は、人材育成に役立つと思います。

●日馬富士公平氏(相撲)



武道精神の教育にあたって第一に大切にしていくのは挨拶、つまり礼儀を重んじることです。第二は目標を持たせることで、目標に向かって努力することの大切さや、結果につながることで自己肯定感を高めることができます。

●瀬戸謙介氏(空手道)



俗にいう文武両道とは、おおよそ技術面を鍛えること(武)と肉体の強さ、文(学問の知識)を述

べることが多いように思いますが、精神面を鍛え、自己を律する力を身につけることが武士道の役目だと思います。

●植芝充央氏(合気道)



私自身、指導者であり武道の求道者である自覚を持ち、日々の稽古に臨んでいます。先生と呼ばれて思い上がるのではなく、互いに学び合う精神が自身の感性を磨き、人間力が高まっていくのだと考えています。

●井上康生氏(柔道)



武道は「死生観」というものに強く関連しています。元は相手を倒す術である武術を学び、死という概念から逆算して、稽古をしてくれる相手に対しての思いやりや、日々の生活で命をいただきながら、自分が生かされていることなどを学べるのではないかと思います。